

言語理論と英語教育(17)

- 第一言語の影響をどう捉えるか -

田 中 彰 一

Linguistic Theory and English Teaching (17)

- How should we consider the crosslinguistic influence of the first language? -

Shoichi TANAKA

Summary

In this paper I intend to consider the following question: how should we consider the crosslinguistic influence of the first language? In order to answer this question, it will be necessary to examine what has been dealt with by the previous cross-linguistic researches. I review the Sapir-Whorf hypothesis, the Contrastive Analysis Hypothesis (CAH), and the theory of transfer in interlanguage, and I propose that crosslinguistic awareness of the first language transfer will give learners a good advantage in their English learning. I also argue that they should have a good understanding of such awareness to avoid the negative transfer which will induce transfer errors in performing English.

Key words: Sapir-Whorf hypothesis, contrastive analysis hypothesis, transfer, interlanguage

1. はじめに

本稿の目的は、第一言語（母語）としての日本語と目標言語である英語の関係を理論的に見直して、第一言語である日本語の影響をどう考えれば英語らしい表現を求めることができるのかを理論的に考察することである。

第2節で、まずサピア・ウォーフ仮説をとりあげ、言語と文化的思考の関係を考察する。第3節では、第二言語習得（SLA）研究の初期の段階で集中して研究されていた対照分析（Contrastive

Analysis）の内容を考察し、対照分析仮説の意義を再考する。第4節では、初期のSLA研究発展の流れを押さえながら言語転移（transfer）の概念を中間言語分析において考え直す。第5節では、以上の考察に基づいて日本語と英語を類型論的に考察し、英語教育における対照分析的研究の意義を捉え直し、より効果的な英語指導の方向を探る。最後に、第6節で言語間の類似性と相違点を認識することの意義を考える。第7節は結論である。

2. 言語表現とサピア・ウォーフ仮説

言語と思考を相対的に関係づけるサピア・ウォーフ仮説は、言語の表現や発想を考える上でまず想起すべき概念である。たとえば、ある言語学辞典では、その仮説は次のように規定ⁱされている。

- (1) 「ある共同体の言語はその文化を組織化する、つまりその国民の現実把握と世界について形作る表象とを組織化する。」

この表現はサピアとウォーフの主張の内容を押さえたものであるが、極言すれば言語がその話者の思考に影響し、それを規定するようにはたらくという、言語相対性を主張している。この強い解釈、つまり「言語が思考を決めてしまう」というふう

に解釈すれば、言語決定論 (linguistic determinism) になる。

しかしながら、Sapir と Whorf は、(1)の仮説を反証可能な定義として述べたのではなく、後の研究者達が、主張が同じ二人の考え方をまとめて「言語相対性仮説」になるとしたものである。ここで、その内容をもう少し吟味するために、(1)の仮説を支持すると思われる Sapir の次の文章ⁱⁱを見てみよう。

- (2) Human beings do not live in the objective world alone, nor alone in the world of social activity as ordinarily understood, but are very much at the mercy of the particular language which has become the medium of expression for their society. It is quite an illusion to imagine that one adjusts to reality essentially without the use of language and that language is merely an incidental means of solving specific problems of communication and reflection. The fact of the matter is that the “real world” is to a large extent unconsciously built up on the language habits of the group.

(2)はおおよそ次のような意味になるであろう。

- (3) 人間は現実世界に一人で生きているのではなく、また普通の社会的活動においても一人でいるのではなく、社会のために表現のメディ

アとなっている特定の言語の中に生かされているのである。人が言語の助けがないままに現実に対応しているとか、言語が意思疎通や内省の問題を解決するための単なる偶然の手段であると考えすることは全くの思い違いである。実際のところ、「現実世界」は、大部分、無意識のうちにその社会グループの言語習慣に基づいて造られているのである。ⁱⁱⁱ

ここで示されている言語と現実把握（思考）の相対性はかなり強いものであるので、言語の形式が認知の型を決定してしまうという言語決定論に近い考えが伺える。しかしながら、ある言語を別の言語に翻訳するということは可能であり、一般に行われていることから、その言語決定論的考えをその強い意味で支持することはできない。実際、認知科学のデータの多くがサピア・ウォーフ仮説が妥当ではないことを示しているようである。（白畑他（2009：176））

しかしながら、SLA 研究においても、同様の発想から、学習者の誤りが第一言語、つまり母語からの影響で起こると考えていた時期があった。次節では、その時期の研究における対照分析仮説（Contrastive Analysis Hypothesis (CAH)）を考察する。

3. 対照分析仮説 (CAH) の意義

第二言語習得 (SLA) 研究が研究の中核に中間言語 (interlanguage) を据える以前の段階、つまり1960年代までは、言語の対照分析が体系的に行われていた。当時の研究者たちは、母語と目標言語の類似点と相違点を見極めるという見込みをもって、言語の対照分析に取り組んでいたのである。そこには、そのような比較分析により、より効果的な目標言語の教授法が見つかるはずであるという強い信念があった。そのような研究者としては Fries や Lado の名前をあげることができる。たとえば、Lado (1957：2) は、「母語に類似した要素は学習者にとって容易であるが、違っている要素は難しくなる」という表現を使ってい

る。このような考えは一般に対照分析仮説 (CAH) と呼ばれている。ここでは、次の Larsen-Freeman and Long (1991: 53) の定義を引用する。

- (4) Where two languages were similar, positive transfer would occur; where they are different, negative transfer, or interference, would result.^{iv}

この考え方では、言語間で類似した特徴は正の転位 (positive transfer) となり、言語間で異なる特徴は負の転位 (negative transfer) や干渉 (interference) を導くということになる。つまり、目標言語における誤り (errors) は学習者の第一言語からの転位の結果であるということになる。(Lightbown and Spada (2006: 78))

これに対して、1970年代の誤り分析 (error analysis) では、学習者のつくりだす学習者言語における誤りに自立的で体系的な言語の特徴があり、必ずしも母語の転位や干渉によっては説明できない誤りが多くあることがわかってきた。それは CAH では説明できないということになった。さらに、学習者は、その第一言語の特徴の中で何が転位可能で、何が転位できそうにないかが判断できる直観を持っているという観察もある。(Lightbown and Spada (2006: 79))

このような研究から、学習者の持つ第二言語の知識は、自立的な規則に基づく体系的なものであり、単に第一言語から出てくるものではなく、言語能力としてはたらく知識の体系になっていくものであると考えられるようになった。Selinker は、そのような目標言語のための知識の体系を「中間言語 (interlanguage)」と名付けた。その説明が現在の SLA 研究の核になっている。この中間言語の発達には、第一言語が何であるかにかかわらず、習得順序に同じ傾向があることが提案された。もっともよく知られている提案は、Krashen の「自然習得順序仮説」である。この仮説によれば、学習者は必ずしも習ったようには習得せず、多くの学習者に共通する習得順序がある。第一言語が何であろうとも、第二言語習得としての英語の文法形態素の習得順序は以下のように進むという。(Krashen (1982))

- (5) 進行形の-ing, 複数形, 繫辞の be

進行形の be, 冠詞

不規則変化の過去形

規則変化の過去形, 三人称単数現在の-s, 所有の's

このように、「中間言語」「自然習得順序仮説」の提案からわかることは、SLA 研究では、第二言語学習者が個別の位置づけをされるのではなく、普遍的な位置づけをされているということである。つまり、SLA 研究は、第二言語学習者が、その第一言語が何であるかに関係なく、習得上の共通した普遍的特徴を共有しているという位置づけで研究を進めてきたのである。

このような研究の方向性は妥当なものであると思われるが、第二言語学習者が持っている習得上の基本的過程のすべてが普遍的で共通しているとはできないのではないだろうか。たとえば、第一言語と第二言語の類似性や相違点が、第二言語の習得に影響を与えるであろうことは十分に考えられることである。実際、Ringbom (2007: 51) は、言語の類似性から、第一言語がフィンランド語とスウェーデン語である場合、第二言語としての英語の習得においては、スウェーデン語話者が非常に有利であることを広範なデータを基に指摘している。Ringbom (2007: 32) は、さらに、言語間の類似性の研究の重要性を指摘し、対照分析 (CA) には、言語学習や言語教育を促進するための基礎となる比較的な記述データが期待されていたと述べている。1960年代から、アメリカにおいては対照分析が廃れていったが、要因の一部には言語学的概念と学習心理学の概念を比較することが容易でなかったためだと述べている。一方ヨーロッパでは、いろいろなプロジェクトが続行されたと述べている。上で述べたように、一時、1970年頃には、SLA 研究において第一言語の役割は最小限になってしまったのに対して、言語の転移 (transfer) の研究は Kellerman の研究等によ

りふたたび注目されるようになり、言語転移の重要性が認められるに至った。(Ringbom (2007 : 323))

4. 言語転移と中間言語分析

Dulay, Burt and Krashen (1982 : 98) が述べているように、⁽⁴⁾の対照分析仮説では、第一言語の「干渉」が第二言語との類似性が少ない場合に起こる。たとえば、第二言語を使えない場合に、第一言語を使って意思伝達を図ろうとする借用(borrowing)が考えられる。しかしながら、この借用は、そのまま定着してしまえば、第一言語に基づく判断が学習者の中間言語に「転位」することになる。その結果が第二言語においてプラスの効果があり、間違いとみなされない言語表現となる場合には、正の転位(positive transfer)と呼ばれる。おそらく、第二言語の学習においては、第一言語との類似性が多く見られて、正の転位が多いのではないかと考えられる。(結果が間違いを導かないので気づかれにくい可能性が高い)しかしながら、逆に、結果が間違った表現となる場合には負の転位(negative transfer)と呼ばれ、誤り(error)が生じているということになる。

具体的に考えるために、転位における間違い(transfer error)を考えてみよう。たとえば、日本語には冠詞がないため、英語を学習する際に日本語話者が冠詞を省略してしまう場合、負の転位が起こっていると言える。逆に、フランス語話者が正しく英語の冠詞を付けることができるとなると、正の転位が起こっていると言える。フランス語には英語に類似した冠詞があるからである。この説明は、一般に日本語話者とフランス語話者の英語習得については、そのような傾向があると言われていることを裏付けることになる。

さらに、Jarvis and Pavlenko (2010 : 174) では、Kellerman の功績として、言語転位が起こる条件には2つあると述べられている。ひとつは、学習者が第一言語と第二言語を類似していると捉えているときで、類似と判断する類型論的な心理であ

るために心理類型論(psychotypology)的な制約だと考えられている。もうひとつは、学習者がある第一言語の形式を有標(つまり言語特有のもの)だと判断して、有標であるから第二言語では使えないと考えるような転位可能性(transferability)判断の制約である。この2つの制約から、転位が起こるかどうかは、第二言語学習者がある言語現象をどう考えるかによるということになる。つまり、学習者は第一言語と自身の中間言語の知識体系の比較をおこなって、類型論的に類似しているからOKと判断するか、第一言語に特有であり有標な特徴であるから第二言語では使うことができないと判断するかに分かれることになる。

そうなると、日本語と英語の表現の対照では、学習者の類型論的な言語認識を適切に指導することができれば、負の転位にならないようにすることができるのではないと思われる。次節では日英語の文を意味タイプ別に観察することによって、その可能性を探ることにしたい。

5. 言語類型論的認識と英語教育

前節まで第一言語からの影響は理論的にどのように扱われてきたかを観察した。サピア・ウォーフ仮説における言語相対論、対照分析仮説における干渉、さらにSLA研究における転位の分析の考察から、英語教育においてはどのような示唆が得られるであろうか。

言語類型論から見ると、日本語と英語の間に類似性があるというのはなかなか考えられないことではあるが、言語に共通した性質は見ることができる。たとえば、動詞や形容詞が表現の要になっていることや、主語が動詞より先に来ることは類似点としてあげることができる。そうした構文の把握については正の転位が起こっていると考えられる。これに対して、負の転移が起こる場合は、やはり基本的な構文や語彙の対応からずれてしまうような、日本語話者にとって意外な対照になってしまう場合であろうと考えられる。

したがって英語指導上注意しておかなければならない対応も基本的な対照関係にならない場合であると考えられる。以下では、便宜上3つの意味パターンに分けた動詞の対応を見ながら、負の転位にならないようにする言語認識を考察してみよう。

5.1. 「存在」と「過程」と「行為」

まず、これまでの動詞分類の先行研究^vを参考に、文表現の意味を便宜上「存在」「過程」「行為」の3つに分けて考えてみよう。まず、「存在」であるが、これは日本語では典型的に「ある」と(生物が主体である場合)「いる」の表現になる。対照される英語表現は、次例のように典型的に be 動詞であると言えるであろう。

- (6) a. 机の上に本がある。

There is a book on the desk.

- b. ネズミが台所にいる。

A mouse is in the kitchen.

次に、「過程」とは、状態変化や移動の意味を表している。したがって、「なる」が典型である。英語で相当する語は、become である。このナル型の動詞には、他に be, turn, come, go など自動詞をあげることができる。

- (7) a. 太郎は先生になった。

Taro became a teacher.

- b. 彼は有名になった。

He became famous.

三つ目は、「行為」である。これは動作や行動をおこなう「する」が対応する。英語のスル型動詞は DO で表すことにする。

- (8) a. 太郎はドアを開けた。^{vi}

Taro opened the door.

- b. 彼はボールを蹴った。

He kicked the ball.

ここまでの考察が正しいとすると、日本語と英語の基本的対照関係は以下ようになる。

(9)

	日本語	英語
存在	アル, イル	BE
過程	ナル	BECOME
行為	スル	DO

この対照表からわかることは、それぞれの対応関係が基本的であるとするならば、この関係は「無標」であり標準的な表現の型の対応関係であるといえることができる。英語学習においては、これらの対応は初期に学習することでもあり、正しく理解できているかぎりにおいて、日本語からの影響は負の転位になりにくいと思われる。

しかしながら、これらの普通の対照とは異なる関係の場合、つまり有標の対応関係となるような場合には、負の転移が起こりやすくなるのではないだろうか。その可能性を以下で考察する。

5.2. 有標の対応①: アル DO

まず、表⁽⁹⁾のアル(イル)が、BE ではなく、have に対応する場合を見てみよう。^{vii}

- (10) a. 彼には子どもが三人いる。

He has three children.

- b. 息子は熱がある。

My son has a fever.

- c. この部屋は窓が3つあります。

This room has three windows.

この有標の対比において、⁽⁹⁾の表によれば、英語表現は BE の動詞を使った次のような表現にそれぞれなるべきである。(? は表現のおかしさを示す。)

- (11) a. ??There are three children with him.

- b. ??There is a fever in my son.

- c. ?There are three windows in this room.

(11)の表現は⁽¹⁰⁾の日本語表現に対応させようとする英語としておかしい表現である。しかしその対応は、日本語で存在を表す「ある、いる」に英語で存在を表す be を対応させるという点で同じ発想の表現方法となっている。その対照的な類似性から判断して、⁽¹¹⁾のように表現すると、負の転位となってしまう。

英語の自然な表現は、⁽¹⁰⁾にあるように、所有の have が用いられる表現である。つまり、日本語の存在表現は、英語では（かなり高い傾向で）所有表現に対応していることになる。

ここで、日本語の話し手が英語を学習する際には、どのような認識が必要であるかを考えてみよう。日本語の話し手は、表現発想の類似性から考えて、日本語と同じ存在発想とすると負の転位となってしまう、自然な英語表現とならないことを知っておく必要がある。自然な英語表現を求める学習者にとっては、この言語対照的な知識は必要な言語認識のひとつであると言える。

さらに、事例に基づいて、同じタイプの「アル DO」となる対比を見てみよう。まず、チャールズ・シュルツ原作のアメリカの人気漫画『チャーリー・ブラウン』シリーズの英語に日本語の対訳が付されているものからとった例を示す。（下線は筆者）

(12) a . Somehow, I sense an element of doubt...

b . なぜか疑惑の動くケハイがある...

ここでは英語が原文である。その DO 表現 sense に対して、「ある」が相当している。翻訳者は日本語の対訳を sense と同じ意味タイプであるスル表現にはせず、存在のアル表現にしている。

次の例は、長谷川町子原作の『サザエさん』シリーズからとったものである。

(13) a . おもいがけない臨時収入があったんで

b . I got an unexpected windfall.

こちらは日本語が原文で英語が翻訳であるが、「ある」に対して got (get) が選ばれている。

(12/13)の例は、⁽¹⁰⁾で見た例外的な対応が、ある have には限られないことを示している。そうすると、対照分析的な認識は、日本語の「ある」に英語の所有的な意味の動詞 (have, get, sense) が対応するというように拡大されていくものと考えられる。

5.3. 有標の対応②：ナル DO

ここでは、ナルが BECOME タイプの動詞では表現されない対比を見る。行為を表す DO タイプ

の動詞と例外的に対応する場合を見てみよう。まず、「なる」が make に対応する例がある。例は『チャーリー・ブラウン』シリーズから。

(14) a . I'D make a PERFECT first lady.

b . わたしは完全無欠なファーストレディになるだろうってこと！

動詞 make の基本的意味は「作る」であり、行為を表している。意味の拡張があったとすると、おそらく作った結果、変化が起こり対象のものに「なる」という意味を派生したのではないかと考えられ、例外的な対応になっていると見なすことができる。

次に、『サザエさん』シリーズから、「なる」が動詞 give に対応する場合を見てみよう。

(15) a . いかなる動機から柔道をならう気になれた？

b . What gave you the idea of learning judo?

(16) a . タバコはよしたがいいですよ、肺ガンになるから

b . These are better because cigarettes give you lung cancer.

これらの例では、英語では「なる」主体の人間が目的語になって、主語が要因として「与える」主体として表現されている。一般式的に示すと、次のようになるであろう。

(17) 日本語：C のせいで、A が B に「なる」

英語：C GIVE A B

英語では、要因 C が A に B を GIVE 「与える」という発想に変わっていることがわかる。

さらに、ナル表現が、英語では使役の make を使う表現に相当する例を見てみよう。『チャーリー・ブラウン』シリーズからの事例⁽¹⁸⁾と『サザエさん』シリーズからの事例⁽¹⁹⁾についても、⁽¹⁷⁾のような一般式⁽²⁰⁾で表現することができる。

(18) a . Because it makes you look stupid, that's why! It makes you look stupid, and silly, and foolish and ignorant!

b . あんたがバカにみえるからよ、それが理由よ！毛布のおかげであんたはバカで間がぬけててアホらしくて無知にみえるの

よ！

- (19) a. あの口じゃウチのお八ギがよけい小さく
みえらア

b. A mouth like that makes our ohagi look small.

- (20) 日本語：C のせいで，A が B にみえる

英語：C MAKE [A look B]

(17)と(20)を比較すれば明かなように，使役動詞 make を使った表現⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾は，基本的に⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾における give の意味関係に似ていると言うことができる。つまり，give の場合は，「要因 C が A に B を与える」という発想であったのに対して，使役の make の場合は，「要因 C が A を B に見えさせる」という使役の意味が加わっているのである。この場合の対照的な言語認識とは，(17)と(20)のような日本語と英語の相違点になる。

このように，文の組み立てにおいて，動詞を要にして主語の選び方，目的語の置き方ができあがるのであるが，日英語でその表現発想が異なることに気づくことは重要な言語認識となると言うことができる。

6．類型論的言語認識の重要性

前節では，無標の対応関係としての表(9)と，それに従わない有標の対照例として，アルと DO，ナルと DO を考察した。表(9)は日本語の表現発想の捉え方と英語の表現発想の捉え方が同じ場合を示したものであるので，言語の共通性と関係している。しかし，言語は共通したものばかりではなく，違った表現発想を持っている。前節で見たアルと DO，ナルと DO の対応は，日本語と英語に見られる相対性と考えることができよう。言い換えれば，それは日本語と英語の類型論的な違いと関係しているということである。

そのような相対的な違いの仕組みを，言語認識として理解しておくことは英語学習に際して自然な言語表現を求めていく上で重要なことである。本稿では，それらを網羅的に扱うことはできなかったが，第5節で考察した例からわかるよう

に，相対的な違いは個々の表現に個別にあるのではなく，型として日本語のアル，ナルに対して，英語では DO に対応したように，まとまった傾向があるようである。それがどのように整理できるのかを今後分析する必要がある。

7．結 論

本稿では，日本語と英語の関係を理論的に見直して，第一言語である日本語の影響をどう考えれば英語らしい表現を求めることができるのかを考察した。

サピア・ウォーフ仮説や対照分析仮説の背景にある言語の相対的な違いが重要な言語間の違いを生み出していることを観察した。したがって，言語転移の概念は，その点を考慮して中間言語分析と結びつけていかなければならない。英語教育においても，それらについての言語認識が学習者に必要な視点を与えてくれると期待できる。

しかしながら，本稿で見た観察と記述は管見的なものに過ぎず，体系的網羅的なものではない。今後より厳密な対照分析が SLA 研究の本流的な研究と連携をとって進められる必要がある。

結論として，言語の普遍性に基づく中間言語を中心とした SLA 研究に言語の相対性の視点を加味していくことで，英語教育をよりよく第二言語習得と関連づけられる可能性があることを指摘しておきたい。

註

- i デュボア他 (1980)『ラールス言語学用語辞典』大修館，p.179。
- ii Sapir (1958 [1929]) p.69。
- iii 日本語訳は筆者の試訳である。
- iv Eckman (1977)は有標性 (markedness) に基づく定義を提案している。
- v Chafe (1970)，Vendler (1967)や中右 (1994)などの動詞の意味分類を参考にしている。ただし，ここでの分類はあくまでも便宜上の意味分類として3つに分けたものである。
- vi スル型の動詞は多いが，たとえば，「開ける」は行為を表すのでスルであるのに対して，「開く」は誰かの行

為ではなく、開いた状態になるという変化を表すので、ナル型と考える。英語も同じであるが、英語では同形の open となる。このタイプの動詞は非対格動詞と呼ばれるものである。

vii この対照は池上(2006)等で従来から指摘されてきた対比であり、次のような例も類例である。

(i) a. うちに空き部屋がある。

b. We have a vacant room in the attic.

この日本語と英語の対比は、角野(2001)のアニメーション作品である『魔女の宅急便』のDVDにある日本語音声と英語音声の対比である。

viii 日本語と英語の話し手は、それらの表現が直感的に「自然な」表現であると思っている。これは第一言語話者としては当然のことである。

参考文献

- Chafe, W.L. 1970. *Meaning and the Structure of Language*. Univ. of Chicago Press.
- Dulay, H., Burt, M. and Krashen, S. (1982). *LanguageTwo*. Oxford. Oxford University Press.
- Eckman, Fred. 1977. "Markedness and the Contrastive Analysis Hypothesis," *Language Learning* Vol.27, No.2, 315-330.
- Kellerman, E. and Sharwood Smith, M. 1986. *Crosslinguistic Influence in Second Language Acquisition*. Pergamon.
- Krashen, Stephen. 1982. *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Pergamon.
- Lado, 1957. *Linguistics Across Cultures: Applied Linguistics for Language Teachers*.
- Larsen-Freeman, D. and Long, M. 1991. *An Introduction to second language acquisition research*. Longman.
- Jarvis, Scott and Pavlenko, Aneta. 2010. *Cross Linguistic Influence in Language and Cognition*. Routledge.
- Lightbown, Patsy and Spada, Nina. 2006. *How Languages are Learned*. (third edition) Oxford University Press.
- Lyons, John. 1968. *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge University Press.
- Ringbom, H. 2007. *Cross-linguistic Similarity in Foreign Language Learning*. Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
- Sapir, E. 1929. "The Status of Linguistics as a Science." In E. Sapir 1958 *Culture, Language and Personality*. University of California Press.
- Selinker, L. 1972. "Interlanguage," *IRAL* 10, (3), 209-231.
- Vendler, Z. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Cornell University press.
- Zobl, H. 1983. "Markedness and the Projection Problem." *Language Learning* Vol.33, No.3, 293-313.
- 荒木博之. 1980. 『日本語から日本人を考える』朝日新聞社.
- 安西徹雄. 1983. 『英語の発想』講談社現代新書.
- 池上嘉彦. 1981. 『するとなるの言語学』大修館書店.
- 池上嘉彦. 2006. 『英語の感覚・日本語の感覚』日本放送出版協会.
- 角野栄子原作, 宮崎駿監督脚本. 2001. 『魔女の宅急便』DVDソフト, スタジオジブリ.
- 小池生夫他(編). 2003. 『応用言語学事典』研究社.
- 白畑知彦他(著). 2009. 『英語教育用語辞典』改訂版. 大修館書店
- シュルツ, チャールズ. 谷川俊太郎訳. 1972. 『売れっ子スヌーピー』ツル・コミック社.
- 鈴木孝夫. 1973. 『ことばと文化』岩波新書.
- 鈴木孝夫. 1990. 『日本語と外国語』岩波新書.
- 田中彰一. 1999. 「言語理論と英語教育⁽⁵⁾ - 非対格性の仮説から発想の違いへ - 」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』4, No.1, 39-51.
- 田中彰一. 2002. 「言語理論と英語教育⁽⁸⁾ - 日英語表現比較から言語文化論へ - 」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』7, No.1, 15-28.
- 寺村秀夫. 1976. 「スル」表現と「ナル」表現」『日本語と日本語教育 - 文字・表現編 - 』『寺村秀夫論文集Ⅱ』くろしお出版(1993)に再録.
- 中右実. 1994. 『認知意味論の原理』大修館書店.
- ハインズ, J. 1986. 『Situation vs. Person Focus 日本語らしさと英語らしさ』くろしお出版.
- 長谷川町子. 1997. Jules Young, Dominic Young 訳. 『対訳サザエさん』講談社.
- 椋垣実. 1975. 『日英比較表現論』大修館書店.
- 巻下吉夫. 1997. 「翻訳にみる発想と論理」中右実編『日英語比較選書1文化と発想とレトリック』第A部, 291. 研究社出版.
- 牧野成一. 1996. 『ウチとソトの言語文化学』アルク.
- 森田良行. 1998. 『日本人の発想, 日本語の表現』中公新書.
- 山岸勝栄. 1998. 『英語になりにくい日本語をこう訳す - 日本語的発想・英語的発想』研究社出版.